

# 自閉スペクトラム症児と母親の適応と相互交渉中の母親の注意共有方略

○永井 祐也<sup>1</sup>・金澤 忠博<sup>2</sup>

(1. 大阪大学大学院人間科学研究科 2. 大阪大学)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 注意共有方略 適応

## 【目的】

ASD 児の共同注意行動は、これまで言語や社会性の発達の予測因子だけでなく、不適応行動の予測因子でもあることが実証されている (Nagai et al., 2017)。具体的には、ASD 幼児の不適応行動には日常生活場面における共同注意行動の頻度が関連していた。ASD 児の共同注意の困難さを他者の関わり方の工夫で補うことで、ASD 児の共同注意の成立頻度を高め、児の不適応を予防することができるかもしれない。児との注意共有を促す関わり方を注意共有方略という。注意共有方略は、ASD 児の注意や興味・関心に応じた関わり方（応答方略）と指示的な関わり方（転換方略）に大別される。応答方略を多用した母親の ASD 児は後の言語や社会性の発達が促進されること等が報告されているが ASD 児の不適応行動との関連は検討されていない。

そこで本研究では、母子相互交渉場面における母親の注意共有方略の特徴と ASD 児の不適応行動との関連を検討した。また、ASD 児の反応率が注意共有方略によって異なることから、相互交渉の円滑さが異なり、育児ストレスを増大させる可能性が考えられる。そのため、注意共有方略の特徴と母親の育児ストレスとの関連を合わせて検討した。本研究における仮説は以下の 2 点とした。

- ① 母親の応答方略は、ASD 児の不適応行動を軽減し、転換方略は、逆に増大させる。
- ② 母親の応答方略は、母親の育児ストレスを軽減し、転換方略は、逆に増大させる。

## 【方法】

### 1. 研究参加者

本研究の参加者は、児童発達支援センターに通園する知的障害児とその母親 31 組であった。内訳は、ASD 児とその母親 28 組 (ASD 群) と ASD ではない児 (ダウン症、ソトス症候群、プラダーウィリー症候群) とその母親 3 組 (DD 群) であった。ASD 群の児の生活年齢は  $54.07 \pm 5.75$  ヶ月齢であり、新版 K-式発達検査 2001 による全領域発達指数が  $44.75 \pm 13.46$  であった。Social Communication Questionnaire 日本語版 (SCQ) の得点は  $24.07 \pm 4.29$  であり、全員がカットオフ値 15 点を上回っていた。母親の年齢の平均は、 $36.86 \pm 4.63$  歳であった。DD 群の児の生活年齢は  $48.67 \pm 15.04$  ヶ月齢、発達指数が  $45.67 \pm 8.74$ 、SCQ 得点が  $7.00 \pm 1.73$ 、母親の年齢が  $35.67 \pm 6.66$  歳であった。

### 2. 手順・評定内容

研究に参加する母親には、児童発達支援センターの相談室で個別面談を実施した。後日、児を連れて大学を訪問してもらい、設定された場面で母子相互交渉が観察された。また、面談終了時に母親が回答する質問紙を手渡し、回答した用紙を密封して児童発達支援センターを通じて提出するように依頼した。

(1) 個別面談: Vineland-II 適応行動尺度を評定した。本研究では、マニュアルに従って算出した不適応行動尺度、外在化問題、内在化問題の V 評価点を分析に用いた。

(2) 質問紙調査: 母親の育児ストレスの程度を評価する日本版 Parent Stress Index (PSI) への回答を依頼した。PSI

は、子どもの側面に関する質問項目（子領域: 親を喜ばせる反応が少ない、子どもの機嫌の悪さ、子どもが期待どおりにいかない等）と、親の側面に関する質問項目（親領域: 親役割によって生じる規制、社会的孤立、夫との関係等）とに大別される。本研究では、マニュアルに従って得点を算出し、総得点、子領域得点、親領域得点を分析に用いた。

(3) 母子相互交渉場面の観察と評定: 母親には、大学のプレイルーム内で子どもと一緒に遊ぶように依頼した。玩具は児の手が届かない高い棚に収納されており、子どもの要求や母親の判断によって自由に使用してよい旨を伝えた。著者が部屋から出た時間を母子相互交渉の開始時間とし、約 10 分間遊んでもらった。その様子は、プレイルーム内に固定されたビデオカメラ 2 台を設置し、記録した。

映像記録を再生しながら、相互交渉開始時間からの 5 分間観察し、5 秒間の観察単位を設定した 1-0 サンプリング法によって母親の注意共有方略（関わりかけ、応答方略、転換方略の有無）を評定した。1 人あたりの観察単位数は 60 であり、総観察時間は 155 分であった。

関わりかけの生起率は、行動が記録されたサンプル間隔数を観察単位数 60 で割った値とした。応答方略、転換方略は、各行動が記録されたサンプル間隔数を関わりかけが記録されたサンプル間隔数で割った値を算出し、各方略の使用率として分析に用いた。

### 3. 倫理的配慮

本研究は大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理委員会の承認を受けて実施された (承認番号: 人行 26-10)。

## 【結果と考察】

### 1. 予備的分析

先行研究で指摘されている ASD 群と DD 群の母子相互交渉の違いを確認するため、予備的分析を行った。Mann-Whitney の U 検定の結果、ASD 群の母親の応答方略使用率は DD 群よりも有意に低かった ( $p < .05$ )。一方で、ASD 群の母親の転換方略使用率は DD 群よりも有意に高かった ( $p < .05$ )。

### 2. 母親の注意共有方略と ASD 児の不適応行動との関連

母親の関わりかけの生起率は、外在化問題の V 評価点と負の相関が見られた ( $r_s = -.46, p < .05$ )。母親の応答方略の使用率は、不適応行動の V 評価点 ( $r_s = -.43, p < .05$ )、および、外在化問題の V 評価点 ( $r_s = -.51, p < .01$ ) と負の相関が見られた。母親の転換方略の使用率は、不適応行動の V 評価点 ( $r_s = .44, p < .05$ )、および、外在化問題の V 評価点 ( $r_s = .54, p < .01$ ) と正の相関が見られた。以上より、仮説①は支持され、特に応答方略は児の外在化問題を軽減することが示された。

### 3. 母親の注意共有方略と母親の育児ストレスとの関連

母親の注意共有方略と母親の育児ストレスとの間には、有意な相関関係がみられなかった。そのため、仮説②は棄却された。単に母親の注意共有方略の特徴だけでなく、それに対する児の反応率の方が影響している可能性が考えられる。

### 【付記】

本研究は科研費 (21K13615) の助成を受けた。

(NAGAI Yuuya & KANAZAWA Tadahiro)